

# デリダのコンディヤック論 ——『たわいなさの考古学』解題——

飯野和夫

## はじめに

ジャック・デリダは1973年初版刊行の『たわいなさの考古学』<sup>(1)</sup>（邦訳は拙訳により刊行、人文書院、2006年7月）で、十八世紀感覚論哲学を代表するフランスの哲学者コンディヤック（1715-1780）<sup>(2)</sup>を論じている。この著作におけるコンディヤック読解は独創的で、コンディヤックの理解に斬新な視角をもたらすものであり、コンディヤック研究、十八世紀ヨーロッパ思想研究として見ても大きな価値を有している。だが、日本では、これまでコンディヤックを研究する人の数は限られており、その思想の紹介も進んでこなかった。そのため、日本ではデリダのこの著作も、十八世紀研究の側からも、デリダ研究の側からもほとんど論じられないまま今日にいたった。だが、日本のコンディヤック研究も近年ようやく進展し<sup>(3)</sup>、この著作の翻訳も出版されたことで、コンディヤックその人の思想、さらにはデリダとコンディヤックの関係が広く興味を呼ぶ条件も整ってきたと言えよう。

私は今後、デリダのこのコンディヤック論を視野に置きながら、コンディヤック哲学がはらむさまざまな問題を順次分析してゆく予定である<sup>(4)</sup>。今回は、そのための前提として、デリダのこの著作の概要とそれが提起する問題系とを提示しておきたい。というのも、この著作の内容を理解することは、それ自体決してたやすくはないからである。議論の各ステップにおいて、そこに絡んでくるさまざまな問題——デリダにはその都度見えてしまうのであろうさまざまな問題——を織り込んでいく執筆スタイルはしばしば私たちが当惑させる。私たちは迷宮に迷い込んだような状態にすらなりかねない。この著作の重要性を確認し、それを活用してゆくためにも、その論旨を整理しておくことは意味があろう。

デリダのこの著作は、コンディヤックの初期の代表作『人間知識起源論』（1746）を主要な対象とし、この著作の校訂新版に付せられた序論として発表された。そこでまず、コンディヤックの思想全体の方向を決定したといえるこの『人間知識起源論』について、必要最小限の事項を確認することから始めよう<sup>(5)</sup>。

コンディヤックは自らの序論でこの著作のねらいを表明しているが、それは知の起源

と生成にかかわっている。「私たちが望むべきは、誰も疑うことができず、他のあらゆる経験を説明するのに十分な一つの最初の〔=第一の〕経験を発見することである。私たちの知識の源泉が何であるか、知識の素材は何であるか、どのような原理によって素材は活用されるのか、そのさいに使うべき道具は何か、その使い方はどのようなべきか、こうしたことを最初の経験は明快に示してくれるはずである」(『起源論』序論)。魂のこの最初の経験とは感覚の知覚であり、また、その知覚の単純な想念あるいは観念であるが、それはさらに「観念の連関 (liaison des idées)」という原理を見いだす経験でもある。実際、すぐ続けてコンディヤックは語っている。「私はこれらすべての問題の解決を、記号との、または観念どうしの、観念の連関に見いだしえたいと思う」(同所)。

感覚の知覚は私たちの知識の最初の素材となるのだが、それがもたらす観念はそれ自体明晰で判明な性質をもつ(同書 I-I-II-11<sup>(6)</sup>)。つまり、知覚に由来する「単純観念」<sup>(7)</sup>(I-III-1 以下)は、「感覚器官から直接私たちにやってくる」のだが(II-II-II-16)、部分をもたないので、それが含むものについてどんな誤解も生まないのである(II-II-III-31)。他方、観念連関は私たちの知識が形成される原理となるが、これも「比べようもなく最も単純で、最も明確で、最も多産な原理」である(II-II-III-43)。つまり、「本書全体を基礎づけている〔この〕原理の正しさは、誰もが自分自身の経験によって確かめようと私には思える」とされる(同所)。

さて、記号(ないしは言葉)こそ観念を指示し、観念を連関させるものだが(I-II-III-29)、そうした記号の意味作用も、単純観念にかかわる場合には明白である。「〔単純観念の名の〕意味は一度に知られる。それは空想的な実在を対象にもちえない。なぜなら、それは単純な知覚と直接関係しているからであり、こうした単純な知覚は、実際、精神に対して現れるままに精神の内にあるからである」(II-II-II-16)。

このように、コンディヤックは「最初の経験」、基本の経験に立ち戻り、そこから知識の生成を跡づけようとするのである。

以上を前提に、デリダの著作を実際に検討することにしよう。この著作の章立ては以下のようになっている。

第1章 二次的な第一のもの——メタフィジーク

第2章 天才の事後修正

第3章 想像——概念の代役、力の話

第4章 傍注または着目——浮遊する二ページ

第5章 『人間知識起源論』への序論——たわいなさそれ自体

本稿では、この章立てに沿ってデリダの議論を追うことにする。以下、筆者の解釈に従って論旨を抽出し、デリダ自身に語らせる形で本書の概要を示すことにする<sup>(8)</sup>。

## 1. メタフィジーク

コンディヤックは『人間知識起源論』の自らの序論で、新しい学問を打ち立てることを提案する。「ものごとをあるがままの姿でだけ見ようとする」(『起源論』序論)メタフィジーク<sup>(9)</sup>を打ち立てなければならない。デリダによれば、それは、それまでの本質と原因のメタフィジークの代わりに、現象と関係のメタフィジークを打ち立てようとすることである。『起源論』に始まるこの新しい学問を、デリダはさらに「開かれたもののメタフィジーク、ものごとそれ自体の現象学」とも形容している<sup>(10)</sup>。(7-8頁<sup>(11)</sup>)

以下、デリダに従って、コンディヤックのこの新しい学問を検討しよう。この新しいメタフィジークは二次的哲学であり、現実の単独性から出発して観念の生成の諸原理を、また一般的観念の最初の産出を、系統立てて復元しようとする。それは分析、あるいは分析的方法と呼んだ方が適切である。コンディヤックによれば、それまでの悪しきメタフィジークにおいては言語は不適切に使用されており、よって、このメタフィジークを矯正するには、別の言語活動を実践しなければならない(『起源論』I-II 導入部)。したがってまた、記号と言葉の別の理論を練り上げなければならない。これは『起源論』の変わらぬ明白なねらいである。この試みは、厳密に恣意的、形式的な、取り決めによる言語の創設として、晩年の『計算の言語』にいたるまで発展してゆくことだろう。(10-12頁)

だが、それは別のよいメタフィジーク、つまり自然なメタフィジーク、言語に先立っているメタフィジークに従うことなのではないか。「よいメタフィジークは諸言語より前に始まった。このメタフィジークに諸言語はその最もよいところすべてを負っているのである。だが、その時このメタフィジークは学問であるというより本能であった。それは人間たちを知らないうちに導いていた自然であった。」(『論理学』t.II, p.400<sup>(12)</sup>; cf. 『計算の言語』t.II, p.435)

新しい「計算の言語」は、その極端な形式化を、単純なものの必然性に従わせることで、この自然のメタフィジークの前言語的な土台を再構成するであろう。学問としてのメタフィジークは、言語活動に先行する本能のようなものに対して自らが言語として持つ関係を、言語の内に再現することだろう (cf. 『推論する技術』t.I, p.619-620)。これら二つのメタフィジークは、実践的なものとその展開としての理論的なものという関係にある。実践の審級の優位、これがこの新しいメタフィジークの決定的で変わらぬ特徴である。(13-16頁)

さて、コンディヤックは「進歩」に注目する。デリダによれば、コンディヤックによる認識の一般理論の企ては、歴史性という一般法則がまず打ち立てられていることを含意している。コンディヤックは、その上に、どのような歴史的な前提条件において自らの認識の一般理論が可能となるのかに関心をよせる。実際、「分析は、どのように私たちが成功したかを示すことで」、初めて「どのようにすれば私たちがさらに成功できる

かを教えてくれる」のだから（『教程 近代史』 t.II, p.229）。(16-17 頁)

こうして、デリダによれば、『起源論』の一般理論は、知識の発達ないし獲得の後からやってくる。つまり、学問のある一つの歴史の後に来て、学問の上での事実を前提とする。一般的方法是本質的に歴史的なのだが、それは、その方法がいつも、ある認識の実践の、ある学問的発見の「後から」、法則の事後の一般化として確立されるからである。実は、一つの学問的発見もすでに、哲学的秩序の内で、別の一つの発見を移し替えている。結局、哲学者は、過去の学問上の画期的変化の事実を移し替え、反復し、さらには拡張し、一般化するのである。(16-19 頁)

ロックが開始するのも、とりわけニュートンの後からである。ロックは、ニュートンが例示したような一般法則というものを、初めて人間知性という個別の分野に適用した。その際、ロックは、先行するニュートンの事例との類比によって未知のものを発見した。類比による発見（発明）——これが今問題とされている論理のもっとも一般的な定式である。ところで、類比によって真であるということは、また分析によって真であるということでもある。ある与件（つまり、それについての命題）が分析され、それが類比によって移し替えられて、新しい対象（それについての命題）が構成される。こうして、コンディヤック自身が主張するところによれば、学問の進歩は、つねに「自同的命題」、分析判断によって行われるということになる<sup>(13)</sup>。(19-21 頁)

コンディヤックのロックに対する関係も、ロックが先行者たちに対する関係に類比的であろう。ロックが開始したような人間知性の学問を、コンディヤックは特に言語活動という決定的な問いについて反復し、修正し、補足するのだ。(21 頁)

コンディヤックは、(ライプニッツと同様に)「自同的命題」の規則、分析判断の規則を普遍的であると見なしているが、これまでに見たところからも想像されるように、これは単純なことがら（一般的規則）への系統的回帰を含意している。また、段階的發展が起こるのは、それ自体は変更不可能な素材の組み合わせないし変様によってだけであること、をも含意している。コンディヤックの探究分野においては、この最初の素材の位置に「感覚」がある。直接的に現前する還元しえない核として感覚があることになろうが、この素材ないし核は、組み合わせ、関係、結びつきといったものの内に組み込まれてゆく。デリダによれば、感覚は単に単純な要素なのではなく、生成の胚でもある。こうした中で知性が形を取る。知性による反省はやがて「こうした素材が有する諸関係を探り、こうした素材を活用する」（『起源論』 I-I-I-5）ことになるとされる。(23-24 頁)

さて、コンディヤックの哲学は周知のように感覚論哲学だが、それはまた一貫して記号の哲学でもある。『起源論』の感覚論は記号論 (sémiotisme) へと発展する<sup>(14)</sup>。また、コンディヤックは自らのこの記号と言語活動の理論を、感覚的であり要素的・物質的である胚を發展させるもの、あるいは「活用する」ものの体系として位置づける<sup>(15)</sup>。こ

ここで、デリダは、類比の原理が、この胚（素材）と発展（活用）という二つの項のあいだの、移行、結合、そして総合する力、をも保証しているとする。よって、この類比の原理が問われるべきである。（24-25 頁）

ところで、観念の「生成」を追跡しようとする立場と、観念の「組み合わせ」を追跡しようとする立場とがありうる。両者は通例は二者択一の関係にある。しかし、コンディヤックは、この観念の「生成」と「組み合わせ」とを把握する要請を二つながら維持していた。彼は、計算と生成との古い形而上学的な対立に抵抗していたといえる。（26 頁）

## 2. 天才の事後修正

しかし、デリダによれば、生成論と計算との二者択一の対立を取り去るという動機は、コンディヤックにあって、この対立を明確にする規則を見つけないはいたらなかった。このことが、後世に解釈の余地を残すことにつながっている。読解において、読み違えと無邪気にも呼ばれているものは、実際には歴史の打撃、歴史の暴力的で利己的な働きである。こうした働きにさらされたコーパスは、自由に使用でき、解釈できるものにされていくだろう。メヌ・ドウ・ピランとともに十九世紀に始まり、二十世紀にいたるコンディヤック読解の歴史は、上の二者択一を前にしたコンディヤックの矛盾、躊躇を告発しながらも、その根柢には迫りえない歴史であった<sup>(16)</sup>。（31 頁～）

生成論と計算との二者択一の解消を考えよう。人間の知の世界では観念の「新しい組み合わせ」が不断に生み出されるのだが、既存の固定された生成モデルと組み合わせモデルは、別々ではこの事実を説明することができないからである。（41 頁）

哲学者は、観念のこの新しい組み合わせについて、その生成について、新しい概念（観念の新しい組み合わせ）を作るべきであることになる。コンディヤック自身、こうした趣旨のことを語っている（『起源論』II-II-III-32）。ここでは新しい論理が要求される。つまり、新しいもの（の付加）は有限数の単純なデータが単に連合ないし錯綜すること（つまりは類比的に連関すること）から生じる、という論理である。この新しい論理は各学問分野の範疇・指標を欺き、それらを脱構築することになる。（43-44 頁）

ところで、コンディヤックは同時に、ある理論が出現する一般的諸条件の理論も提起している。新しい学問の出現は個人としての天才のひらめきに由来している。しかし、天才といえども、ある諸条件の下でしか見つけることはない。発見の諸条件を媒介・伝達するものはいつも言語の歴史、記号システムの歴史である。天才のひらめきは、言語によって、記号間の類比のある状態によって、生じるのである。一方、各言語固有の特質も、それ自体、記号の組み合わせの独自の仕方であると解釈できるのである。（45-49 頁）

実は、コンディヤックが語っている「歴史」は、多くの場合、一つの自然な秩序の発展でしかない。とはいえ、天才の役割は消えることはない。天才はある能力を自分のも

のとして保有しており、その能力を今度は言語に向けるのである。天才は、「自分たちの見方、感じ方を表現するために、類比的規則に従って、少なくともそこからできるだけ逸脱しないようにしながら、新しい言いまわしを考案せざるをえなくなる」（『起源論』II-I-XV-153）。しかし、この進歩の可能性は、逸脱（écart）の可能性、言語を崩壊させる可能性でもある。「言語の最終的な進歩をもたらす原因を示したので、次は、言語が頹廢してゆく原因を探究する番であろう。といっても、両方の原因は同じなのである」（同書 II-I-XV-158）。「あらゆる語法は先人たちによってすでに利用されてしまっているので、彼〔天才〕には類比から逸脱することしか残されてはいない。こうして独創的であろうとして、彼は一つの言語の崩壊を準備するはめに陥るのである」（同所）。凡庸な人たちがまねをし、たわいない言いまわしが幅をきかせてゆく。たわいないものの考古学とはこの天才の逸脱を考察することでもある。（50-51 頁）

### 3. 想像

コンディヤックにおいては、天才の根本的性質は想像であるように見える（45 頁）。ところで、想像とは第一に、類比的連関や反復により、今はなくとも、かつてそこにあったであろうものを再現することである（『起源論』I-II-II-17）。観念の類比的連関においては、観念は相互に記号として働いていよう。かくて、想像の場は記号の機能する領分であり、それゆえ言語の進歩と個人的な天分とが交流し合う逸脱の働きの領域でもある。（54 頁）

さて、想像にかかわるコンディヤックの論証の能動的なバネは、観念の「連関の力」という価値である。類比関係もこの連関の一種であろう。一つの作用あるいは一つの構造から別のそれへの移行は、いつもこの連関の力に従ってなされよう。観念のある新しい組み合わせも、ある最も大きな「連関（の力）の量」を発見することから生まれるであろう。（55 頁）

既知のものとの未知のものとの連関の量、類比のプロセスとしての分析、現前するものと不在のものとの連関のエネルギー、こうしたすべては、反復（描き直すこと、補うこと）の力としての力の概念の内で交差し、つながり合う。しかし、このつながりあるいは交差のシステムは、規則的にテキスト全体の静かな破裂を生み出し、一種の裂け目あるいは分裂を個々の概念や個々の言表の内に生じさせる。二つの例が検討される。（56 頁）

(1) 説明が力の概念に頼るとすぐに、説明は適合しなくなる。「連関の力」はそれ自体、隠喩的、類比的観念しか生み出せない。実際、コンディヤックにとって、力の「最初の観念」、原義は、身体の運動の「内的な感覚、あるいは意識」から発する。だが、私たちはここでどんな定義にも達していない。隠喩と類比によってこの原義は移し替えられ、「比喩的に」拡張される。物理学の分野において、力は引力として普遍的連関の物理モ

デルを打ち立てるが、この普遍的連関が、さらに類比によって観念の領域に移されることになる。(56-57頁)

(2) 他の分裂は想像にかかわる。『起源論』において、初め想像はただ再生的であり、先に知覚されたものを「描き直す」。だが、現前するものと不在のものとの「連関の力」は「新しいもの」の産出を解き放つ。この産出的力もお想像と呼ばれている。この〈新たな想像〉の働きは、類比、隠喩、既知のものと未知のものとの連関、あるいは現前するものと不在のものとの連関に従うがゆえに、言語全体に曖昧化の危険を招き入れるかもしれない。この産出的想像は、結局、真理と偽という価値を持ちうることになる。『起源論』によれば、私たちは、この新たな想像を統御できる場合にかぎり、それを知識の主要なばねとすることができるのである(同書 I-II-IX-75)。(60-61頁)

さて、ニュートンは物理的宇宙の学問において真理の秩序を理解した。ニュートンは、本源的な性質に基づいてものごとの間の連関を統御する単純でただ一つの原理、という観念に達したのである。こうした唯一の性質に保証されて、その性質の上に、言説は自同的命題<sup>(17)</sup>(同語反復ではないそれ)によって、つまり理性の明証の内になされうるようになる。自同性は「ある命題がそれ自体で明証であると認められるしるし」なのである(『推論する技術』t.I, p.621)。(64-66頁)

コンディヤックはニュートンの発見を心理学の次元に移し替える。あらゆる経験を一つの最初の性質——それ自体で知られ、次いでただ変化するだけの性質、つまり感覺能力——にまで連れ戻す。彼は、理性の明証を求めつつ、事実の明証や内的感覺の明証<sup>(18)</sup>をも援用して、普遍的な連関(観念相互の、観念と記号の、類比的関係における記号相互の)を探究する。ニュートンの言説のこうした移し替えを可能にしているものは、類比の一般的原理である。類比は私たちを迷わせることもあるが、それは類比が弱い時、「連関の量」が十分大きくない時である。類比こそ方法であり、言説を成立させるものである。(66-67頁)

コンディヤックは、数学の対象と方法を学問に共通の言語モデルと見なし、学問的領域一般は均一であると考えた。この均一性は、推論にかかわる類比関係に単に由来するだけでなく、この類比が自然に基づいているということにも由来している。この類比はただ自然の産出を拡張しているだけなのである。故に、類比の原則は限界を持たない一般性を持つのである。(67頁)

ニュートンは移し替えるべきであるのに対して、ロックは補足し修正しなければならない。だが、修正すべき点はすべて、ロックが秩序づけを欠いたせいで記号を捉えそとなった、ということに帰着するようだ。かくして、歴史的な進歩があったとしたら(たとえばロックからコンディヤックへの)、自然な秩序がゆがめられていたからである。秩序の喪失と秩序への回帰というこの二つの要因を考慮に入れる必要があるだろう。コ

ンディヤック自身の『起源論』の可能性が、『起源論』において、あるいは後の諸著作において、少なくとも事後的に明らかになったのも、当初いろいろな観念の自然な秩序に背いていたためなのである。『起源論』の構成の下手際のせいで、「観念連関の原理」の広がりには隠されてしまい、この書が書き上げられた時ようやく明らかにされたように思われる。(70-74 頁)

#### 4. 傍注または着目

『起源論』執筆時のコンディヤックにとって、この書が実現するもっとも独創的な前進は、記号の理論、記号の類比の理論であった。彼は観念の間にも、「記号の類比関係から力を得ている種々の連鎖」を想定した。しかし、記号は経験一般の初めのものと考えられてはいない。いろいろな記号の連鎖は知覚の上位に立つものである。(77-80 頁)

コンディヤックによれば、現前する対象がたまたま知覚から外れたり、知覚が自ずとなくなったりする時に、想像の機能とともに、記号の空間が開かれることになる(『起源論』I-II-II-17)。この「時」とは、知覚を不在にさせるもの自体としての「時間」から発していよう<sup>(19)</sup>。とはいえ、経験の秩序、魂のさまざまな働きの秩序において、記号は決して最初には措定されていない。(81 頁)

記号は分類し、明らかにする。しかし、実は、記号が働くより前に、すでに混雑した観念、言語以前・記号以前の判断、そしてもの言わぬ分析といったものが「私たちを行動させ」ている。記号による意味作用より前に、感覚が分析し、認識し、判断しているのである。だが、それは混雑としたあいまいな仕方であり、つまり本能の自然の光によってである。(85 頁)

記号は分類し、明らかにするのであった。いろいろな記号のあいだの類比の量が記号の力となる。これはいわば理論的な力であり、この力が、上に見た実践的な力というべきものがどのように「私たちを行動させる」のかに着目する。こうして、記号によって、理論的知識を得るための方法が成立することになる。とはいえ、方法は感覚という素材を、人間の実践的な方法や暗黙の分析を、展開させるだけなのである。記号はおしなべて計算的な本質を持ち、この計算の力は自らよりも古い力を、行為、情念、欲求<sup>(20)</sup>に関して反復する。理論的なものは、実践的なものに着目し、補うことなのである<sup>(21)</sup>。(85-88 頁)

現状の学問の言語には欠陥がある。そこで、実践的な欲求、その前=記号的な層にまで遡って新しい学問の言語を生み出す必要がある。「それぞれの学問は固有の言語を求める。(…)だが、(…)言語はまだ作られないままなのである。(…)私たちはとりわけこの状態を補おうとしているのである」(『交易と政府』t.II, p.242)。さて、行為、実践という事実の先行性は、デリダによれば、私たちへの「欠落」として現れる<sup>(22)</sup>。着



目という理論的で方法的な作用は、この先行性、欠落に着目する。欠落の源に着目し「描き直し」た後に、必要なものを付け加える。だが、必要なもの（欠け落ちているもの）は、付け加えられることで余剰、価値の過剰、たわいない無価値としても姿を現す。デリダによれば、こうしたものは（記号として、価値として）あらゆる交流（交易）を可能にしているのだが、また、方法を志向する立場からは、取り除かなければならないだろう。（88-89 頁）

以上のことから帰結として、コンディヤック自身のうちに次のような考えをみてとることができる。

(1) 言語活動は、上に見たような実践的に知られていることの一つの例である。将来のあらゆる学問ないし言語理論は、観察可能な事実——言語活動があり、話すべくしてそれを話している、という事実——に諮るべきである。

(2) 欠落を補うものによって生み出された過剰という結果が、経済的、言語学的な交流を、また欲得ずくの取引や、おしゃべりのたわいなさを、引き起こす。二つの分野で類比的に、商品、貨幣、貨幣代わりのチップ、あるいは、観念、充実した記号、むなし記号が生み出されることになる。（89-92 頁）

さて、デリダはここで目的論の問題に言及する。テキストに関して目的論とは何なのか。デリダ自身の立場としては、テキストをそれ自体から引き離し、いろいろな対立からなる大きな仕組みを分析すべきである。この分析の中では、テキストのプログラムはずらされ、テキストの目的論はあらかじめ解体され、テキストの意味の円環は未決定になる。コンディヤックのテキストにおいても、実は、目的論はテキストの全体を本来引き離された一部分に結びつけて——『起源論』をその切り取られた肋材の一つに最後に一度だけつるして——いるだけなのであり、テキストの仕組みのレベルで目的論は解体されているのである。（100-101 頁）

とはいえ、コンディヤックの意識においては、人間精神の発展はその始めからできる限り大きな制御の方へ、つまり、私たちが完全に思いのままにできる恣意的・制度的な記号の制定<sup>(23)</sup>の方へと目的論的に方向づけられている。真の記号には恣意的なものしかない、あらゆる意味作用はこの制定への過程である、人間の能動的本質こそ自由である——こうしたことを、コンディヤックは『起源論』の意味として再確認しているとされる。（102-103 頁）

コンディヤックがガブリエル・クラメールに宛てた手紙<sup>(24)</sup>が示していることだが、コンディヤックは、『起源論』の出版後に初めて、今見たようなこの著作の目的論的意図を告白している。しかし、これも目的論に従った事後修正（après-coup téléologique）であるにすぎない。結局は、論述内容を明示するための秩序（順序）を新たに明らかにしているにすぎない。コンディヤックは、記号はそのものとしていつまでも（toujours

déjà) 恣意性へと定められている、といつもすでに語っていたのである (103-105 頁)。

## 5. たわいなさそれ自体

記号は容易に使用できるため、私たちは記号を通じて、観念に対して支配力を保持し、観念を「意のまま」にすることができる。しかし、記号はまたすぐに、今度は、もろく虚ろに、はかなく無意味になって、観念を失い、観念から離れて道に迷ってしまう。単にもの、意味から、単に指示対象から離れてしまうばかりではない。そのときから、記号は何のためにもならないままであり続ける。何も指示することなく交換される過剰、チップ (賭札) のようなもの、欠如の過度の強調、であり続ける。たわいなさはチップだけで満足することにある。それは、もはや何も意味しないシニフィアンとともに生まれる。こうしたたわいなさは記号に突然生じるのではない。たわいなさは (それ自体で現れることがありうるとすれば) 記号に本来の始原、始動、秩序づけなのである。たわいなさは逸脱の構造それ自体なのである<sup>(25)</sup>。(111-112 頁)

『起源論』で批判された悪い形而上学、悪い修辞学、悪い言語活動一般はたわいなさものの部類に入る。つまり、必然性がないか空疎である記号の羅列である。必然性がないというのは、コンディヤックによれば自同的命題によって行われなければならないからである。空疎というのは、自同的命題に見えても、単に同語反復であるにすぎず、何の観念も持たず、何の対象も表象しないからである。「対象もなく、何も言わない」からである。「たわいなさものを生じるのは観念のあいだにおける自同性ではなく、名辞のあいだにおける自同性なのである」(『計算の言語』 t.II, p.431-432)。(112 頁 /115 頁)

同じこと (le même)、類比、分析、自同的命題といったものの価値を絶えず援用して、コンディヤックは自分の言説をたわいなさから守らなければならなかった。類比的なもの、肯定的なものだったが、これは否定的なものも生み出した。つまり、類比的なものに類比的なもの、無用でむなしい見せかけの言説であった。これ以来、コンディヤックの学問の方法は、記号を際限なく積み重ねることになり、その際、隠喩学として、シニフィアンを結びつけながら行うことになるとされる。(112-113 頁)

では、実際、どのようにすればたわいなくならずいられるのだろうか。

たわいなさをより近くで見よう。無価値なシニフィアンの逸脱は、無価値なシニフィアンの漂流——その中で無価値なシニフィアンが繰り返され、自己に一致し、自己以外には何も意味しなくなるような漂流——を引き起こす (123 頁)。この際、たわいなさは、裂け目——観念の反復と言葉の反復という二つの反復を互いに切り離して、反復というものを二つに裂く裂け目——において働く。どういうことか。互いに切り離される「二つの反復」は、観念の反復と言葉の反復として互いに性格を異にしている。コンディヤックによれば、観念の反復、つまり複数の観念のあいだの自同性はたわいなく

はない。複数の言葉のあいだの自同性こそたわいない。コンディヤックはこのことを判断、文、述語の言表について語っているのだろう。しかし、彼は同じことを、観念それ自体の自己への同一性（*identité à soi*）や、言葉それ自体の自己への同一性についても確かに前提としているはずである<sup>(26)</sup>。たわいなさはシニフィアン（言葉）の逸脱から生じるが、また、シニフィアンが、その閉じられていて表象をすることのない自同性の内で、それ自体へと屈曲することからも生じるのである。（125-126 頁）

したがって、たわいなさを免れるのは、非＝自同性という意味上の危険をあえて冒すことによってだけである。コンディヤックはこの非＝自同性を隠喩と呼び、言語活動の本来の構造と考える。ただし、それはただ非＝自同性を類比的・目的論的に新たな自同性として再所有しようとするためなのである。（126 頁）

さて、ここでデリダは、簡潔ではあるが、時間にまつわる問題にふれる。時間は、目下（現在）の関係のそれ自体との隔たりだが、反復可能性の内での、現在のそれ自体との関係でもある。こうした時間は、(1) 感受性の根源と、(2) たわいないものの領分とを同時に指し示しているだろう<sup>(27)</sup>。（127 頁）

すなわち、(1) 時間は欲求と、欲求を一般に対象に結びつける欲望という表象作用との起源である。欲求が現れ、また欲望という表象作用に変わるのは、ただ事物間の比較において時間の裂け目が開くことをとおしてである。(2) 比較をする際の差異には一般に単に程度の差だけがある。反復や断絶にかかわるあらゆる概念は、この原則に従って、時間の内に展開される。（129 頁）

(2) はどういうことだろうか。程度、漸進的差異は、ある（*est*）という意味を分解してしまい自同的な命題を損なう。しかし同時に、自同的命題に総合の価値を付与することで、新しい命題を総合判断<sup>(28)</sup>として可能にもする。総合の価値は認識を前進させ、たわいなさを禁じることになる。したがって、程度を生み出す要因としての「時間」は同時にたわいなさの可能性も不可能性も示している。たわいないものについて言えば、そのもろさ、はかない構造は、(程度の) 差（の〔内にある〕時間）にほかならない。あるいは、間隔にほかならない。また、(1) として見たように、時間の隔たり（自らに知覚される現在が反復されることと不在であること）が、記号の内部と観念の内部に表象としての方向づけを開始すると言うこともできる、のである。<sup>(29)</sup>（130-131 頁）

さて、記号のたわいない不在、言い換えれば、対象に対する記号の関係の中断は、記号以前に生起している。一般化あるいは抽象化の始めにおいてすでに、つまり、ある記号を「比喩的に」受け取ることを許す意味の拡張の過程からすでに、言語活動の起源に隠喩が組み入れられる。「拡張された」意味はつねに対象との関係において、不在で、浮遊し、弛緩しているおそれがある。そのため、私たちは観念自体の二重性からも逃れえない、とされる。これがたわいなさの最後のあるいは最初の衣装である。たとえば

「私が一つの石、二つの石と言うとき、観念という語はその本義において受け取られている。なぜなら、私は一つ、二つという観念を、これらの石という名詞に私が結びつけている対象に認めているからである。しかし、私が一、二と言うとき、そこには一般名詞しかなく、これらを観念と呼ぶのはただ拡張によってのみである。」(『計算の言語』)<sup>(30)</sup>  
(131-132 頁)

観念を事物のないままに、記号を観念のないままにしておき、名辞の自同性をその対象であるべき観念の自同性から乖離したままにしておくたわいない拡張は進歩自体とともに増大する。この拡張は、たとえば交流、言語活動、制度に対応して拡がってゆき、これらを崩壊させてゆく<sup>(31)</sup>。(132 頁)

さて、欲求はコンディヤックの体系の唯一の原理である。一方、欲望は、その力においては欲求に他ならず、欲求の方向を定めて欲求に様態を与えるだけである(128-129 頁)。その結果、(1) 一方では、たわいなさは欲望によって欲求のもとに現れる、と考えることができる。欲望こそが対象にかかわる表象としての方向づけを開始し、補いの記号を生み出す。ただし、この記号はいつも、不在、自由 (disponibilité)、拡張によって、いたずらに作動する可能性があるのである。(132-133 頁)

だが、(2) 他方では、逆に欲求自体がたわいない、ということもできる。欲望を欠くなら欲求はいかなる対象も持たず、それ自体から変化せず、それ自体だけで閉ざされており、トートロジックであり、石のようなままだからである。これに対して、デリダは結局、コンディヤックが『動物論』において言及する、人間のもつ「欲望することへの欲求」を援用する。ここにおいて欲望はもはや対象への関係ではなく、欲求の対象である。欲求を一種の飛翔へと向かわせる果てのない目的である。

この一種の間隙は欲求を駆り立て、欲求の飛翔が生じる。人間(コンディヤックが仮定した、人間と同等の能力をそなえた「立像」)がこのことに目覚めるや、彼はまた間隔を狭めるための仕事に取りかかる。石のような状態に向かう傾向は、たわいない空転に抗して、いろいろな記号の頑固な自同性、つまり別のたわいなさを生み出し始める。つまり、正当性それ自体を生み出し始めるのである。(134-135 頁)

\* \* \*

私はここまで、著作の全体にわたってその論旨を追った。本稿の課題は以上でつきる。この著作の議論の内には、記号とそれにまつわるたわいなさ、形而上学批判、事後性、類比、目的論、自同性あるいは自同的命題、といった主題が交差していた。これらについて検討していくことが、これからの課題となる。

注

(1) Jacques Derrida, *L'Archéologie du frivole*, Galilée, 1990. デリダのこの著作ははじめ1973年に、コンディヤックの主要著作である『人間知識起源論』の校訂新版(Condillac, *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, éd. Charles Porcet, Galilée, 1973)に付せられた序論としてガリレ(Galilée)社から刊行された。邦訳は拙訳によって、次のように刊行された。ジャック・デリダ『たわいなさの考古学——コンディヤックを読む』人文書院、2006年7月。そのほかの版や英訳について、また、この書のタイトルについては、邦訳の「訳者あとがき」を参照されたい。この著作は、序論として執筆されたこともあり、邦訳で本文135頁ほどの小ぶりの著作である。デリダが十八世紀思想に本格的に取り組んでいたこと、コンディヤックとその周辺思想について極めて豊富な読書の裏付けを持っていたことは本書によって明らかである。

(2) コンディヤック(Étienne Bonnot de Condillac, 1715-1780)は十八世紀感覚論哲学を代表する哲学者。代表的著作として次のようなものがある。『人間知識起源論』*Essai sur l'origine des connaissances humaines*, 1746(邦訳、『人間認識起源論』古茂田宏訳、岩波文庫、1994年、全二巻)；『体系論』*Traité des systèmes*, 1749；『感覚論』*Traité des sensations*, 1754(邦訳、コンディヤック『感覚論』加藤周一、三宅徳嘉訳、創元社、1948年)；『動物論』*Traité des animaux*, 1755；『パルマの王子の教育のための教程』*Cours d'étude pour l'instruction du prince de Parme*, 1775(1758年から1767年まで、パルマ公国の王子フェルディナンドの家庭教師を務めたコンディヤックが、この間の教育のための教材をまとめた大著であり、以下のような構成になっている。第1巻『文法』、第2巻『書く技術』、第3巻『推論する技術』、第4巻『思考する技術』、第5巻～第10巻『古代史』、第11巻～第15巻『近代史』、第16巻『歴史研究』)；『交易と政府』*Le commerce et le gouvernement*, 1776。『論理学』*La logique*, 1780。『計算の言語』*La langue des calculs*, (1798)(コンディヤックの死によって未完に終わった。類比にもとづく理想的な言語として算術的計算から代数までを分析し、日常言語による推論への示唆を得ようとする)。

(3) コンディヤックの最初の代表作『人間知識起源論』の邦訳が古茂田宏氏の手によって出版されたこと(邦題『人間認識起源論』、上下、岩波文庫、1994年)、山口裕之氏による研究書『コンディヤックの思想 哲学と科学のはざままで』(勁草書房、2002年)が刊行されたことで、わが国でもコンディヤック研究が発展する条件がようやく整ってきた。日本におけるコンディヤックの研究と紹介の歴史のあらましについては、『たわいなさの考古学』の「訳者あとがき」も参照されたい。

(4) 筆者はすでに「コンディヤック『人知起源論』に見る真理探求の方法論」(名古屋大学言語文化部『特定研究シリーズ5 誤解：その言語文化的諸相』1995年3月)で、『人間知識起源論(人知起源論)』における方法の問題を論じている。

(5) 『人間知識起源論』の特質を的確に把握した次の論文を参考にする。Rodolph Gaché, «Archéologie et frivolité», *L'Herne*, 2004, p.172. このガシエの論文は、近く拙訳によって、他のデリダ関係論文とともに刊行の予定である。『人間知識起源論』をはじめとするコンディヤックの哲学全般については、上に掲げた古茂田宏氏と山口裕之氏の翻訳と研究、さらには『たわいなさの考古学』訳注も参照のこと。

(6) 本稿では『人間知識起源論』への指示は、partie(篇)、section(部)、chapitre(章)、パラグラフの順にI-II-III-4のように掲げて指示することにする。なお、同書の邦訳(『人間認識起源論』古茂田宏訳、岩波文庫、1994年、全二巻)では同じ区分を順に「部」、「章」、「節」と訳しているの

で注意されたい。

(7) 単純観念とそれに対置される複合観念の概念はロックに由来している。『人間知性論』第二巻第二章第一節参照。

(8) 以下に提示する概要は、「デリダによれば」といった注記の有無にかかわらず、基本的にデリダが語っている内容で構成している（引用符は煩雑になることを避けるため省略した）。以下のように論旨を抽出する責任は筆者にある。また、文章として一貫させ、内容の理解を助けるため適宜言葉を補い、表現に修正を加えた。なお、以下の概要の一部は、『たわいなさの考古学』の「訳者あとがき」における著作の紹介と重複している。

(9) *métaphysique* この語は「形而上学」と訳されて定着しているが、コンディヤックは「本能」をメタフィジックと呼ぶ場合もあるため、コンディヤックの思想を論じる場面では「形而上学」という訳語は避ける。

(10) デリダはこの新しい学問を、「提示された現象」（8頁）にかかわる「意識の哲学、知覚の現象学」であるともする（82頁原注）。ガシェはここから、「デリダがこの学問を原＝現象学、あるいはその名をもつ以前の現象学としてとらえていることはもはや疑いが無い」としている（Rodolph Gaché, *op.cit.*, p.173）。

(11) 以下、段落の末尾などで『たわいなさの考古学』の対応箇所を指示する。指示は邦訳の頁による（注1参照）。

(12) 『起源論』以外、出典の指示には以下の『コンディヤック哲学著作集』（全3巻）を用い、巻、頁を t.II, p.435 などと示すこととする。*Oeuvres philosophiques, Corpus général des philosophes français*, 3 vol., éd. G. Le Roy, P.U.F., 1948.

(13) 「自同的命題」とは、本来、主語が述語として反復される命題をいう。だが、ライプニッツにおいては、主語の一部分が述語として反復される命題も自同的命題に加えられ、ある命題の主語の概念を分析して、このような自同的命題に還元することが命題の論証となると考えられた。本書の内容に即するならば、主語の位置には、たとえば引力などの一般法則を置くことができよう。一方、「分析（的）判断」とはカントに由来する用語だが、主語の概念の内にすでに述語の概念が内包されている判断をいう。自同的命題と分析判断とは、同じ概念間の関係を、命題と判断という異なった観点から考察していると考えてよい。

さて、デリダによれば、今問題になっている学問の進歩とは、一般法則を個別の分野に適用することである。つまり、ある与件に対するのと同じ分析方法が、類比によって新しい対象に適用されるのである。コンディヤックにおいて知は「自同的命題」あるいは「分析判断」によってもたらされると考えられたから、その同じタイプの知が類比によって繰り返されることになる。

(14) デリダは、感覚論を記号論へと発展させるものは「類比学」であるともしている。（注13でみたように）コンディヤックによれば、知は自同的命題によってもたらされるのであったが、こうした知が類比によって発展する。したがって、デリダはこの発展を、「包含の自同性ではなく、『自同的命題』をとおした発展」であるともしている。（24頁参照）

(15) 「記号の使用」（25頁、『起源論』序文より）（による思考）は、感覚から発展し、次いで今度は感覚を発展「させ」、活用する。学問として感覚論から発展する記号論は、この記号の使用の「体系」化である。（25頁参照）

(16) 『たわいなさの考古学』第2章冒頭では、19世紀フランスの哲学者メヌ・ドゥ・ピラン Maine de Biran (1766-1824) によるコンディヤック読解が検討されている。以下にその内容を一瞥

しておこう。

ビランは、コンディヤックがある著作から次の著作へとシステムの矛盾を手直ししていったと考える。実際、コンディヤックは、『起源論』に続く『感覚論』において受動的な感受性（感覚能力）という単純で明確な原理に到達した。しかし、彼は再びそこから遠ざかろうとし、記号学的能動主義、代数学的人為主義、言語学的形式化へと向かうことになる。だが、そこにおいては進歩は不可能であり、このシステムの中心的な欠落によってコンディヤックは生成と計算とのあいだで躊躇し続けることになる。（32-35 頁）

さて、ビランは、受動性の結果としての観念論（つまり自由の不足）を批判する。ビランはまた、この批判を、能動主義、人為主義、形式主義としての観念論（つまり自由の過多）への批判へと転ずる。というのも、自我の受動性の範囲内でだけ、自我は自分自身の内に閉じ込められたままで、観念論へと向かうのであり、自由の過多は自由の不足の他の面なのである。こうした「矛盾」を免れるために、ビランは、彼なりに、「二重の観察の根拠まで、あるいは意識の最初の実事まで、この最初の実事が立脚する始原の状態まで遡」ろうとすることになるのである（『思考の分解』）。（38-39 頁）

(17) 自同的命題については訳注 13 を参照のこと。

(18) デリダが指示する箇所、コンディヤックは、三種の明証、さらには四つ目としての「類比による判断」について次のように語っている。「私たちが自ら観察することで事実を確かめればいつでも私たちは事実の明証を持つ。（…）／あなた〔パルマの王子〕は感覚（sensations）を持つことができる。このことはあなたが内的感覚（sentiment）の明証によって確信していることである。だが、理性の明証を持つと確信できるのは何によってだろうか。自同性によってである。二足す二は四となる、は理性の明証による明証の真理である。（…）／三つの明証と〔事実の明証を補う〕他人の証言がなければ、私たちはなお類比によって判断する。（…）観察する現象の間の類似関係に着目し、そこから観察できない現象を確信することは、類比による判断と呼ばれるものである。」（『推論する技術』 t.I, p.620）なおここで、「二足す二は四となる」という命題においては、概念の分析が行われており、デリダが「同語反復」としたものには該当しないことになろう。

(19) すなわち、この本源的な時間によって、現前する感覚は記号へと開かれることになろう。Cf. Rodolph Gaché, op.cit., p.175.

(20) コンディヤック哲学において欲求は人間に本来的であり、制度的記号の獲得以前の状態でも、欲求にもとづいた自然な分析が行われ、実践的認識が成立していると解釈できる。デリダはコンディヤックの哲学を「欲求の哲学」と「記号の哲学」の側面をもつと考えている（112 頁）。

(21) 85-88 頁の内容に関連して、ガシェは、デリダの記述をやや離れて、大意次のように論じる。「実践的認識がありうるためには、それは観念連関をすでに生み出していなければならない。言い換えれば、言語としての記号の出現以前に、記号の存在自体はすでに効力を及ぼしており、いろいろな感覚や単純観念を結びつけている。言語記号は結局、すでに感覚や身ぶり言語に作用しているものに『着目して、それを補うこと』（88 頁）なのである。感覚の中ですでに作用しているものを反復しつつ、言語記号の機能はただ感覚の諸観念の中に明晰さを投射し保証し、そこから理論的認識を獲得することなのである。」（Rodolph Gaché, op.cit., p.175）

(22) デリダは次のように語っている。「この〔着目の理論的で方法的な〕作用は、事実の上での先行性に、事実（最初は——つまり自然においては——行為、実践である）の先行性に着目する。その際、この先行性とは、自己から欠け落ちるものは自己自身に先行している、ということなのである。（自己に対する）類比関係によって、この先行性とこの欠落が結びついているのである。」（89 頁）

(23) 他方、記号は、その原初の形態においては偶然的記号（観念を想起させるオブジェ）と自然的記号（感情を表す自然な叫び）であるとされている。『起源論』I-II-IV-35、『たわいなさの考古学』訳注4-3を参照のこと。

(24) 1750年9月以降執筆の手紙。クラメールについて、コンディヤックからクラメールに宛てられた書簡類については『たわいなさの考古学』訳注4-11を参照。

(25) たわいなさが記号の逸脱の構造であるという点について、ガシェは、デリダの記述をやや離れて、大意次のように論じている。「この記号の逸脱は同時に充実した記号とむなしき記号との条件である。よって、たわいなさは意味作用の可能性にかかわっている。それは意味作用の起源にあり、分かたれた起源、いかなる本来性も持たない起源、それゆえ自己から欠け落ち、あらゆる自己への同一性を欠いた起源、である。」(Rodolph Gaché, op.cit., p.176)

(26) デリダの本文では、ここにさらに補足的な議論が挿入される。「これら〔観念における自同性と言葉における自同性という〕二つの自同性の相互の差異こそが、(…) 確かなものとたわいないもののあいだの隔たりを説明するだろう。だが、コンディヤックは二つの反復の力を互いに結びつけた。(…) 記号の連関なしには観念の連関はないことを指摘しようとした。反復それ自体の内における〔観念と記号の〕二つの反復のあいだの境界は、それが再生産され、表現され、意味作用をもつことができるためには、境界が排除したものの自体〔二つの反復の結合〕を生み出さざるをえないのである。」(126頁)

(27) ここでの(1)(2)の区分は便宜的に筆者が立てたものである。「時間」については、すでに第4章(81頁)でもふれられていた。

(28) 総合判断とは、主語の概念のうちに含まれない述語を新たに主語に加え、知識を拡張する判断をいう。自同的命題に総合の価値を付与するとは、上に見た、「非=自同性を類比的・目的論的に再所有」(126頁)することと同じことを指している。そして、この再所有とは、類比・目的論に基礎を置いて、非=自同性を「複数の観念のあいだの自同性」(同所)へと統合してゆくことであろう。

(29) こうして、デリダによれば、(1)表象作用と(2)たわいなさは、時間の不可避の結果である。ここからガシェは次のように指摘する。「時間の構造はコンディヤックにおいて意識と知覚の哲学を崩壊させる。この哲学は、その確かな起源を感覚能力の最初の経験に見出すべきだったのであるが。」(Rodolph Gaché, op.cit., p.178)「コンディヤックはたわいなさを明らかにし、それに反対して闘い続け、それを系統的に排除しようとしたが、このたわいなさは時間——その衝撃は自己への現前を開始し、同時に禁ずる——と固く結ばれている。より正確に言えば、たわいないものの問題は、時間という何ものでもないものの問題それ自体なのである。」(同所)

(30) ガシェは、デリダの記述をやや離れて、次のように論じる。ここでガシェはコンディヤックの「現象学的な新しいメタフィジーク」を「始原学〔考古学〕archéologie」と呼んでいる。「この〔観念自体の〕二重性は、結果として、認識の進歩が立脚する始原学をあらかじめ解体してしまう。この始原学と目的論は、認識を前進させてたわいなさを禁じようとするが、同時に、自明な現前する核——自同性を失うことなく反復されることが出来る核——の可能性は打ち砕かれてしまう。その結果、人間の知識にかかわる始原学/目的論は、かつてそこから身を守ろうとしたたわいなさに似かよってしまう。それと異なるのはもはやただ程度の問題なのである。」(Rodolph Gaché, op.cit., p.177)

(31) ガシェはデリダのこの部分の記述を受けて、自らの論文を次のようにむすぶ。「たわいなさはただ起源にあるだけではない。(…) それは進歩とともに増大する脅威であるばかりでなく、いつ



も進歩の帰結となるおそれがあるのである。」(Rodolph Gaché, op.cit., p.178)

